



## エビデンスを探す：情報源とその使い方

河合 富士美

### I. エビデンスとは何か

Evidence Based Medicine (EBM) とはエビデンスに基づいて診療行為を行う一連の行動指針である。ここでいうエビデンスとは、適切な研究デザインによる研究結果が発表された文献情報（原著論文）を指す。これまでも文献検索は図書館員の重要な業務であったが、もれなく検索し検索結果を渡すところまでがわれわれの役割であった。EBMの普及に伴いそれにエビデンスを求める、つまり質の高さの吟味をする視点が必要になったといえる。

### II. 情報源の種類

エビデンスの高い情報はさまざまな形態で提供されている。それは大きく4つに分けられ、それらを使う手順を簡単に図に示した（図1）。

#### 1. 教科書

これまでの教科書はエビデンスがはっきり示されていなかったり、編集に時間がかかり出版される頃には内容が古くなるなどの欠点があった。しかし最近では Harrion's Online など主要な教科書の電子化が進んでいる。また、UpToDate や Clinical Evidence などの EBM を目的とした電子教科書が登場し、エビデンスを探すための最初にあたるべき情報源となってきた。Up-

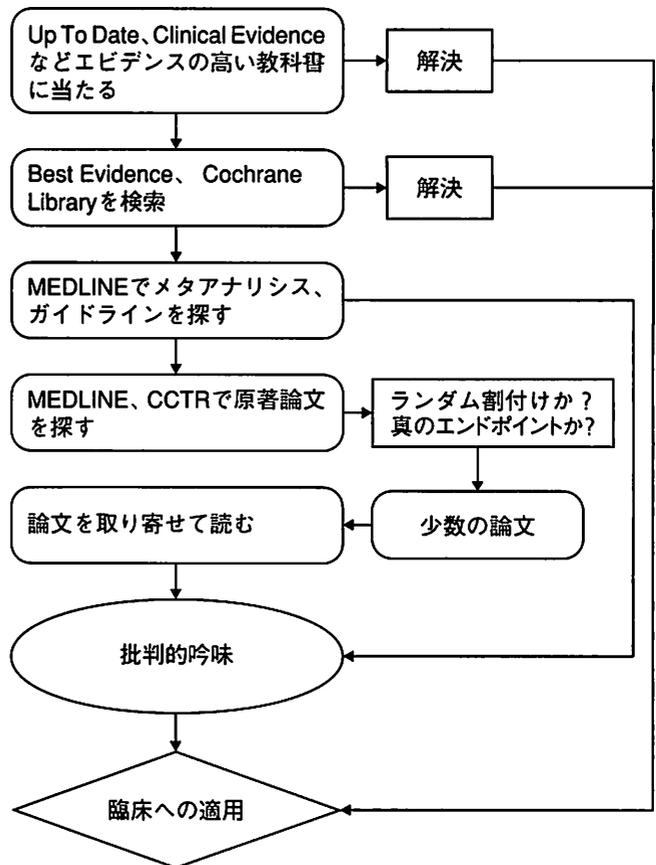


図1. エビデンスを探す手順  
(名郷直樹：EBM 実践ワークブック、南江堂；1999<sup>1)</sup>より一部改変)

ToDate と Clinical Evidence については別項で詳しく解説する。

#### 2. 雑誌

雑誌に収録されている原著論文はその数の多さからエビデンスを探す主要な情報源である。また定期的に刊行されているので最新の情報を得ることができる。つまり最新のエビデンスの多くは雑誌論文から得ることができるといえ

かわい ふじみ：聖路加国際病院医学図書館  
fjmkw@luke.or.jp

る。しかしその数の多さから、文献を得るためには文献データベースで検索することが必要である。また、エビデンスのレベルもさまざまであり、それを確認するためには得られた文献を批判的吟味することが必須となる。

### 3. 文献データベース

現在よく使われているのは MEDLINE (Pub Med や OVID)、医中誌 Web、JOIS の国内医学文献ファイル、看護の文献であれば CINAHL などである。例えば外国文献を探す場合に MEDLINE だけを探せば十分とはいえないが、他のデータベースを利用すると料金が発生してしまうため、手軽に使うことは難しいであろう。とりあえずはこれらのデータベースが利用できる環境を整えること、また利用方法を修得しておくことが必要であろう。

### 4. 二次的出版物

EBM の普及とともにエビデンス検索を主目的とするデータベースや雑誌が製作、発行されている。Cochrane Library (後述) や、Best Evidence などである。Best Evidence は、ACP Journal Club と Evidence Based Medicine を収録したデータベースであり、内科系、臨床医学の主要雑誌のなかからエビデンスの高い雑誌を抽出し、それらの構造化抄録に編集者のコメントをつけて発行されている。雑誌論文の全文が掲載されているわけではないので、ブラウジング向けの情報源である。

## Ⅲ. エビデンスのレベル

エビデンスのレベルは、目的が診断なのか、治療なのか、予後なのかによって求められる研究デザインが異なる。たとえば治療の論文で1番レベルが高いのはランダム化比較試験 (RCT) のシステマティック・レビューであるが、予後の文献の場合はコホート研究のシステマティック・レビューである。詳しくは松本らの作成した表を参照いただきたい<sup>2)</sup>。

## Ⅳ. 主要な情報源

### 1. UpToDate

UpToDate は Internet と CD-ROM で提供されている電子教科書である。制作には3,000人近い医師が携わっており、年3回全内容の30%が更新される。約4,500のトピック、4万ページ以上のフルテキストデータ、1万件以上の画像データ、1,600件以上の薬剤情報、10万件以上の MEDLINE 抄録を収載する膨大な情報源である。

内容は16領域、さらに3領域を作成中である (表1)。内科系教科書の印象が強いが、当院では外科系の医師にもよく利用されている。エビデンスは明示されておらず、トピックによって内容の新しさや観点にばらつきがある、内容が英語である、また臨床環境も日本とは異なるなどの問題はあがあるが、忙しい臨床医にとっては有用な情報源である。なお、病院として Web 版を契約すると非常に高額であり、そういう意味では利用することが非常に難しい。UpToDate についての詳細は丸岡の報告を参照されたい<sup>3)</sup>。

表1. UpToDate の収載領域

成人のプライマリ・ケア	家庭医学
剂情報	血液病学
腎臓病学	腫瘍学
リウマチ学	心臓病学
内分泌学	消化器病学
肝臓病学	感染症
肺疾患	婦人科学
産科学	女性保健

(作成中：アレルギー・免疫学、神経学、小児科学)

### 2. Clinical Evidence

Clinical Evidence は BMJ と ACP により1999年創刊された (※現在は BMJ が単独で出版)。日常的な臨床問題に対するエビデンスを簡潔に要約している。改訂は6ヶ月ごとで、およそ100トピックを収録している。雑誌、CD-ROM、オンラインでアクセスできる。なお、日経 BP 社より日本語版が出版されている<sup>4)</sup>。

Clinical Evidence の前書きには「Clinical Evidenceは エビデンスを抽出しているが、エビデンスの欠落を埋めようとは試みていない」「Clinical Evidence は「月の明るい面だけではなく暗い面も」示している」ということが書かれている。これは、Clinical Evidence はさまざまな介入のエビデンスのあるなし、レベルが高いか低いかを示しているだけという意味である。各トピックスの要約のページには、診療上の疑問、複数のキー・メッセージ、および対象となる介入オプションのリストが示され、有効性が見出されたか否かに従って分類されている。

そのカテゴリーは以下の6つである。

①有益である

複数のランダム化比較試験からの明確なエビデンスにより有効性が示されており、予測される有害性が有益性に比べて小さい介入

②有益である可能性が高い

「有益である」に分類される項目に比べると、有効性がそれほど十分には明らかになっていない介入

③有益性と有害性のトレード・オフ

臨床医や患者が、個々の状況と優先度を考慮しつつ、利益と害の比較考量を行うべき介入

④有益性不明

現時点でデータが不十分か、データの質が不適切である介入（有益であると広く受け取られているが、しばしばRCTが非倫理的であるという理由で、RCTにより正式に検討されていない介入を含む）

⑤有益性に乏しい

「無効ないし有害である」に分類される項目に比べると、無効性がそれほど十分には明らかになっていない介入

⑥無効ないし有害である

無効または有害性が、明確なエビデンスにより示されている介入

Clinical Evidence には具体的な治療手技や手順は記載されていないのでマニュアルとして使うことはできない。しかし、どの治療が有効な

のか、とっさに判断するためにはとても有用な情報源である。

### 3. Cochrane Library

Cochrane Library はコクラン共同計画が提供するシステムティックレビューのデータベースである。年4回改訂され、CD-ROM とインターネットで利用できる。Update Software 社や Aries 社、OVID では EBMR として提供されている。Cochrane Library は以下の4つのデータベースで構成されている。

(1) The Cochrane Database of Systematic Reviews (CDSR)

コクラン共同計画が作成するシステムティック・レビューのデータベース。完成したものは全文が、進行中のものはプロトコルが収録されている。検索し抄録を見るだけなら PubMed でも可能。

(2) Database of Abstracts of Reviews Effective (DARE)

英国ヨーク大学のThe National Health Services Centre for Reviews and Dissemination (NHS CRD) のレビューアーと情報スタッフが作成。全世界のシステムティック・レビューの構造化抄録が収録されている。NHSCRD (<http://nhscrd.york.ac.uk/>) のサイトでも検索できる（無料）。

(3) The Cochrane Controlled Trials Register (CENTRAL/CCTR)

世界中の RCT・CCT 論文を集めたデータベース。収録は抄録まで。システムティック・レビューではないことに注意が必要である。質の吟味もされていない。

(4) The Cochrane Review Methodology Database (CRMD)

システムティックレビュー作成のためのデータベース。

## V. EBM と病院図書館

今後図書館員には2つの能力が必要となる。1つは臨床のためにすばやくエビデンスとなる

文献情報を検索し、得られた文献の研究デザインやレベルを把握できる能力。そしてもう1つはクリニカルパスや診療ガイドライン、システムティックレビュー作成のための徹底的で完全な文献検索と文献の批判的吟味を行い、そしてそれをデータベース化し管理する能力である。容易なことではないが、ここで積極的に取り組むかどうかはわれわれの仕事の将来がかかっているように思う。とりあえず、PubMed や EBM 関連データベースを使いこなせるようになること、受け入れや検索などの際に「この論文の研究デザインは何だろう？」と興味を持つてみることから始めてみてはどうだろう。

#### 参考文献

- 1) 名郷直樹. EBM 実践ワークブック. 東京: 南江堂; 1999.
- 2) 松本直子, 河合富士美: EBN 実践のための文献検索ガイド5 原因、予後、診断のエビデンスを探す. EB Nursing. 2001 ; 2 (1): 77-85.
- 3) 丸岡由子: 臨床支援ツール UpToDate. ほすびたるらいぶらりあん. 2002 ; 27 (2): 142-146.
- 4) 日本クリニカル・エビデンス編集委員会監修. クリニカル・エビデンス日本語版 2002-2003. 東京: 日経 BP 社; 2002.